

## 女子学生における自己と父母の認知について (4)

——因子別得点をもちいたクラスター分析の試み——

秋 山 幹 男・有 馬 道 久

ふとした切っ掛けで1972年から秋山は、女子青年が自己と父母の三者の関係をどのように捉えているのかに興味をもつようになった。以来、青年後期にある女性が一体どのように自分を見つめているのか、また、両親についてはどのような認識をもっているのかについての研究を続けることになった<sup>1)2)3)</sup>。この一連の研究に用いている調査項目は、主として、西平が青年の自我同一性の調査用に作成したものである<sup>8)9)</sup>。これは、これまでに彼が自分で作成した、対人関係、自己意識、社会態度、人生態度などの調査項目の中から選び出したもので、自己像、青年像、男(女)性像を調べるにふさわしいと考えた75の項目から成っている。西平は、自我同一性とは「自己自身の性格および行動特性が、社会的役割期待と一致する強度」であると操作的に定義した。これに基づいて、ある男子青年が自己像と、(自己が主観的に捉えている)青年像とを一致させているなら、その若者は青年的自我同一性を肯定しているとみなし、また、男性像(男らしさ)と一致するなら、自己の男性的自我同一性を肯定しているとみたのである<sup>9)</sup>。

彼との出会いは『新しい存在と価値の発見』というテーマの下にまとめられていた、“「存在」への自覚過程”(1970)に触れたことに始まる<sup>8)</sup>。そこに取り上げられていたものの中で、特に、Eriksonの精神発達諸相の発生的図示(式)と、彼考案のこの「自我同一性」調査項目表に強い印象を受けた。青年心理学における新しいテーマはこれだな、と直感したのである。さらに、本文に書かれていた、「父母の中に自分もそうなりたと思う特性を見出して、自分も無意識的に同様の行動様式をとる場合、つまり、対象と自己との一体化の心理過程が同一視(identification)であり、その心理過程の動きや結果を、『本当の自分』として受容し、自覚し、統合する主体的な機能が同一性(identity)である(p.138)<sup>8)</sup>」という箇所にも刺激を受けて、自己の中に生きている父母の存在に関心をそそられることになったのである。その時から、彼の調査項目表を用いて、ずっと女子学生が捉えている自己と父母の認知についてのデータを収集することとなり、今もこれが続いているのである。

途中、この調査項目使用にはそれなりの迷いが生じた。75項目のうち、「(性的に)純潔な」と「大人のまねをする」を除いて73項目になり、次いで、両親の側からみた「娘—配偶者—自分」の三者認知をも調査の対象とすることを決めた折に、さらに17項目を整理した<sup>4)</sup>。以来、56項目を中心としたデータの処理がなされてきている。この様な流れの中で、手計算的アプローチの「7区分表示法」が誕生し、認知における類似と相違を探る有効な方法となったのである。しかし、このままこの研究を続行していくとしても、気がかりな事が一つあった。それは、調査項目があくまでも青年性と自己の同一性を測定するために作成されたものだということである。これを自己と両親の関係をみるものとして用いる場合には、これら56項目は一体どのような人格認知的因子(次元)によって構成されているのか。これまでのデータを整理し、これからの研究を進めていくためにも、この点はどうしても今、ここで確かめておきたいと思ったのである。

さらにもう一つ欲を出して、「はい」と「いいえ」の方向性を問わないで集計する7区分表

示法とは違ったやり方で、学生達の認知の違いを群分けしてみたいと考えた。つまり、この研究では5段階評定のデータをそのまま活用した形での認知差の抽出も狙ってみた。

本研究の目的：(1) 因子分析の手法を用いて、56の性格特性ならびに行動特性項目が構成している人格認知の因子構造を明らかにする。

(2) 因子分析の結果で得られたいくつかの因子をもとにして自分と両親の因子別得点を出し、これを入力として用いた場合、コンピューターは女子学生のみた自己と父母の三者認知の似より、または、相違をどのような形で仕分け(析出)するのだろうか。ここではクラスター分析を試みてみる。

## 方 法

**対 象 者** 広島文教女子大学文学部(国文学科・英文学科・初等教育学科)と短期大学部(幼児教育学科)の1・2年生である。このうちの1年生は、第Ⅱ期調査(1982年から1985年まで)の協力者であり、その第一年目に当たっている。(第Ⅰ期調査は、10年前に遡る1972年から75年にかけて実施された。)284名の回収ができたが、今回は、母子家庭の学生のデータ5人分を保留にさせてもらったので、279名が分析の対象になった。

**実施期日** 1982年(昭和57年)12月中旬に調査用紙が配布され、同年12月25日までの間に回収された。

**実施方法** 調査用紙を封筒に入れて学生達に配布し、記入が済んだら提出するように求めた。記入は各自の住居においてなされた。

**調査内容** 西平が作成した75項目のうち73項目で調査がなされたが、分析に当たってはさらに17項目を除外した56項目のみを利用し、すべての処理を行った(表1を参照)。評定の対象は、「自分自身」「青年らしさ(女性)」「母親(自分の)」「父親(自分の)」の4つで、この順に冊子にし綴込である。ただし、今回も「青年らしさ」については分析から外した。学生達には、各評定対象ごとに5段階で評定するように求めた。

**データの処理** 得られた結果は、「非常にそう思う」から「まったくそう思わない」まで、5～1の得点に変換し直された。次いで、各評定者(個人)ごとに3枚のパンチカードを用意し、「自分自身」「母親」「父親」の56項目について得点をパンチした。なお、本研究の解析はすべて、広島大学情報処理センター HITAC M-200H を用いて行われたものである。

## 結 果 と 考 察

### 1 人格認知因子(次元)の抽出

本研究ではまず、各評定者(学生)が「自分自身」「母親」「父親」についてそれぞれ同一の56項目で評定(回答)しているので、この性格特性の得点をもとにして、三者間に共通する人格の認知次元を抽出することにした。この解析には因子分析法を用いた。

評定者(279)×対象(3)の837をサンプルとして、評定値に関する56×56の項目間の相関行列を求め、これを入力データとして主因子解法により因子を抽出した。得られた結果より固有値の推移を検討したが、第4因子と第5因子の間に「ひじ」(推移の落差が大きいこと)が見られたので、4因子で抽出を打ち切ることにした。次にバリマックス法によって直交回転を行い、単純構造に変換しなおした。なお、第4因子までの寄与率(説明率)は全分散の40.7%であった。

女子学生における自己と父母の認知について (4) (秋山・有馬)

この結果に基づいて、因子負荷量の絶対値が .400 以上でかつ、他の因子に重複負荷しない項目を抽出し、因子ごとにまとめてみたものが表 1 である。

表 1 性格特性項目の因子負荷量

項 目	Factor 1 内 向 性	Factor 2 自己顕示性	Factor 3 誠 実 性	Factor 4 明 朗 性	h <sup>2</sup>
しよげやすい	<b>.668</b>	.215	.055	-.100	.505
おく病な	<b>.649</b>	.079	-.084	-.214	.480
感傷的な	<b>.616</b>	.162	.170	.194	.472
意志の弱い	<b>.614</b>	.117	-.332	-.094	.510
甘 え た	<b>.585</b>	.298	-.210	.111	.487
ロマンチックな	<b>.557</b>	.120	.204	.279	.444
行動力のある	-. <b>.537</b>	.189	.298	.395	.569
他人を気にする	<b>.528</b>	.260	.060	-.057	.353
指導力のある	-. <b>.514</b>	.162	.340	.314	.505
スケールの大きな	-. <b>.492</b>	.022	.325	.371	.486
内 気 な	<b>.490</b>	.025	.040	-.340	.358
服従的な	<b>.458</b>	-.114	.086	-.114	.243
利己的な・自己中心的な	.061	<b>.670</b>	-.157	-.042	.479
支配欲の強い	-.037	<b>.639</b>	.107	.103	.432
強 が り	.072	<b>.598</b>	-.041	.070	.369
うぬぼれの強い	.125	<b>.593</b>	-.128	.037	.385
わがままな	.308	<b>.545</b>	-.280	.050	.473
ひねくれた	.160	<b>.523</b>	-.243	-.202	.399
頑 固 な	-.166	<b>.507</b>	.128	-.157	.326
虚栄心の強い	.158	<b>.471</b>	-.085	-.056	.257
粗 暴 な	.030	<b>.459</b>	-.347	-.009	.332
礼儀正しい	-.095	-.167	<b>.587</b>	.177	.413
ねばり強い	-.376	-.028	<b>.554</b>	.100	.459
几帳面な	-.028	-.115	<b>.544</b>	-.063	.314
ひたむきな	.154	-.124	<b>.522</b>	.138	.331
ものを深く考える	.078	.159	<b>.515</b>	-.063	.301
包容力のある	-.391	-.122	<b>.476</b>	.261	.462
正義感の強い	-.113	.019	<b>.464</b>	.262	.297
献身的な	.195	-.170	<b>.449</b>	.188	.304
親 切 な	-.054	-.282	<b>.446</b>	.246	.342
やさしい	-.061	-.330	<b>.446</b>	.261	.380
なげやりなところのある	.371	.312	-. <b>.427</b>	-.062	.421
無責任な	.294	.296	-. <b>.419</b>	-.156	.374
あきっぱい	.379	.306	-. <b>.407</b>	.169	.431
調和のとれた	-.183	-.280	<b>.402</b>	.251	.336
明 る い	.009	-.149	.046	<b>.675</b>	.480
ユーモアのある	.019	-.067	.057	<b>.651</b>	.432
友人の多い	-.211	-.026	.093	<b>.593</b>	.405
さっぱりした	-.275	-.116	.028	<b>.510</b>	.350
冒険好きな	-.085	.331	-.040	<b>.467</b>	.336
未来に大きな希望をもつ	.009	.174	.187	<b>.424</b>	.245
孤 独 な	.268	.353	-.019	-. <b>.422</b>	.375

しつと深い	.524	.412	-.062	-.054	.451
不安定な	.473	.406	-.284	-.125	.485
神経質な	.392	.228	.317	-.168	.334
疑い深い	.210	.398	-.049	-.269	.277
理想主義的な	.224	.367	.181	.204	.259
ヒステリックな	.266	.351	-.098	-.104	.214
趣味の広い	-.124	.145	.181	.384	.217
生き甲斐を感じる	-.234	-.040	.330	.382	.311
素直な	.186	-.328	.332	.345	.371
ニヒルな	.030	.199	-.118	-.345	.173
体の強い	-.274	.121	.053	.178	.124
独立心の強い	-.267	.294	.192	.125	.210
宗教的な	.057	.123	.283	-.012	.099
古いものの考え方をする	-.052	.217	.216	-.251	.159
固有値	6.067	5.279	4.818	4.175	20.339
寄与率 (%)	19.1	8.6	7.6	5.5	40.7

**因子の命名** 第1因子に高い負荷量を示すものは12項目で、しよげやすい(.668)、おく病な(.649)、感傷的な(.616)、意志の弱い(.614)などを中心に構成されている。人を意識しているわりにはものごとに対し消極的で、内にこもりがちであるという人格の側面を析出しており、「内向性」因子と命名した。第2因子は、利己的・自己中心的な(.670)、支配欲の強い(.639)、強がり(.598)、うぬぼれの強い(.593)を中心とした9項目で構成されている。自己主張が強く、相手に自分の存在を認めさせたいという、自己中心的な側面を捉えているので、「自己顕示性」因子と命名した。第3因子に関しては、礼儀正しい(.587)、ねばり強い(.554)、几帳面な(.544)、ひたむきな(.522)、ものを深く考える(.515)の他に9項目が高く負荷している。節度をわきまえた温かみのある懐の深さと、何ごとにも粘り強く、手を抜かずに打ち込むという人柄の面を示すところから、「誠実性」因子と名づけた。第4因子に関係するのは7項目で、明るい(.675)、ユーモアのある(.651)、友人の多い(.593)、さっぱりした(.510)が中心となって構成されたものである。明るく、社会性があり、未知なるものへと前向きに取り組むという人格の特徴を捉えたものとみて、「明朗性」因子という命名がなされた。

析出されたこれら4因子は、56項目のうちの75%に相当する42項目で成り立っている。残りの14項目の因子負荷量については、表1の後の方に付記してある。400以上でかつ第1と第2因子に重複負荷した性格特性項目としては、「しつと深い」と「不安定な」がある。これによっても、内向性と自己顕示性という人格の認知次元が、心の動揺（落ち着きの無さ）や不安定さと結びついたものであると解釈することも不可能ではあるまい。また、350以上の因子負荷量をみせるものを取り出してみると、神経質な（第1因子.392）、疑い深い（第2因子.398）、理想主義的な（第2因子.367）、ヒステリックな（第2因子.351）、趣味の広い（第4因子.384）毎日の生活に生き甲斐を感じる（第4因子.382）等があがってくる。これらの項目からも、この度「内向性」「自己顕示性」「明朗性」と命名された因子の各々の特徴をうかがうことができよう。この4因子の構成にあまり関係をもたなかった項目は6つで、宗教的な、古いものの考え方をする、独立心の強い、体の強い、ニヒルな、素直なであった。

## 2 自己と父母についての因子別平均得点の比較

まず、マイナスの高負荷量をみせた項目の得点は、 $(6-x_i)$ の変換を行った。次いで、因子を構成している項目得点を加算し、これを項目数で割って、評定対象(3)ごとの4因子について因子得点を算出した。調査全体(N=279)の因子別平均得点とSDを表したのが表2である。

表2 調査全体(N=279)の因子別の平均得点とSD

因子	対象	対象			t検定		
		自分自身	母 親	父 親	自-母	自-父	母-父
1 内 向 性		3.26 0.57	2.57 0.50	2.25 0.59	***	***	***
2 自己顕示性		3.09 0.65	2.52 0.67	2.82 0.72	***	***	***
3 誠 実 性		3.40 0.42	3.77 0.43	3.74 0.50	***	***	
4 明 朗 性		3.61 0.64	3.65 0.58	3.55 0.67			

\*\*\* P&lt;.001

内向性と自己顕示性の因子得点では、自分に比べ両親の方が有意な低得点の傾向をみせている。女子学生達は自分について内向性が高いとみているのに対し、両親は共に低く、特に父親の低得点化が著しい。対人関係の中で、積極的なかわりを維持していくという人格の面に視点を定めるならば、この因子得点が低くなるほど自分に捕らわれず、相手の気持ちを汲み取る心の余裕ができ、精神的にも安定してくるという感じがする。近い将来社会人となり、結婚し、家庭を営みはじめるに従って身についていく発達の変化を垣間見る思いである。自己顕示性では、青年後期にある自分自身で得点が高く、家庭における中心である母親において最も得点が高い。一家の主婦として、利他の精神が身についているという評価であろうか。妻として母としての学生達の未来の姿らしきものが、この次元の認知の中に浮き上がってくる。

誠実性次元では、自分も両親に近い高得点の方に認知的接近をみせている。しかしながら、この懐の深さと粘り強さの面についても、青年後期の女性は両親を自分よりも高く評価している様である。明朗性については、三者間の認知に差がみられない。学生達はこの次元を支えやバネにして、対人的な積極性を身につけ、自己中心性から脱皮しつつ、誠実にものごとに取り組むという“人生への身のこなし方”(西平)を体得していくのかもしれない。

## 3 各因子の平均得点をもちいたクラスター分析の試み

クラスター分析(cluster analysis)とは、全対象を少数個のクラスターに分割することであり、特定の計算手順(algorithm)により、多くの観察対象について“似ているもの”を集めて分類する手法である<sup>5)</sup>。ある対象が似ているということは、なんらかの意味における距離が小さいことであると言う。今回使用した平均距離法とは、それぞれのクラスターに属する個体間の距離の平均で定義されたものである。

本研究の大きな特色は、4つの因子を用いて自己と父母の三者認知を捉えようとする場合、どのような似よりに基づいて群分けがなされるのか、言い換えれば、認知における個人間の差を識別することにある。これまでの手計算的手法により工夫開発された7区分表示法では、採り得ないであろうと思われるもう一つ深い人格認知の次元に的を絞り、そこに横たわっているかもしれない似よりと相違を抽出するために、コンピューターの力を借りてみることにした。

クラスター分析のこの試みは、質的レベルでの分析に重みをつけることを狙ったものである。

評定者をグループ化するために、各評定者の対象3（自分自身、母親、父親）×4因子（内向性、自己顕示性、誠実性、明朗性）の計12のデータに基づいた、評定者（279）×評定者（279）の相関行列（類似性行列）が求められた。次に、これを入力データとして平均距離法による階層クラスター分析を実施した。18のクラスターに分けるように命令した結果は、表3のような人数構成になった。8つのおおきなクラスターが全評定者の95.3%を包括している。なかでも、第Ⅰクラスター（CI）に属するものが全体の70.3%も占め、“似ている”という判断処理がなされたことは驚きであった。

表3 調査全体（N=279）のクラスター分析で抽出されたクラスターと人数

クラスター	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX～XVIII
<i>n</i>	196	32	8	7	2	9	6	6	13
出現率(%)	70.3	11.5	2.9	2.5	0.7	3.2	2.2	2.2	4.7

このクラスターⅠ（*n*=196）に属する学生達の因子別の平均得点は、表4のように調査全体（N=279）の結果とほぼ一致するものであった。ただし、第4因子の明朗性については、自分と父親、母親と父親の間において、全体には見られなかった有意差が生じている。

表4 クラスターⅠ（*n*=196）の因子別の平均得点とSD

因子	対象	自分自身	母 親	父 親	t検定		
					自-母	自-父	母-父
1 内 向 性		3.22 0.49	2.59 0.42	2.32 0.51	***	***	***
2 自 己 顕 示 性		3.02 0.58	2.51 0.52	2.85 0.57	***	***	**
3 誠 実 性		3.36 0.33	3.70 0.34	3.65 0.43	***	***	
4 明 朗 性		3.56 0.54	3.62 0.50	3.44 0.57		*	**

\*\*\*  $P < .001$     \*\*  $P < .01$     \*  $P < .05$

CIとCII以下の間には構成人数に大きな相違があることから、この段階での各クラスター間の比較検討は一先ず保留にして、まずは全体のほぼ3/4近くを占めているクラスターⅠ（CI）にスポットを当てることにした。“なんらかの似より”によって一度は群化されたものではあるけれど、さらに掘り下げて追求していくならば、それなりの差異が見られるかもしれないという事で意見の一致をみたため、再度のクラスター分析を試みることに決めた。再分析では大事をとって、35のクラスターを抽出するよう命令してみた。その結果は表5に示すような人数構成が得られた。C1からC8までの8つのクラスターのなかに196人のうちの72.4%が包括されていた（これはN=279の全体から見ると、50.9%の学生に相当する）。

表6は、クラスター別に12の因子（3対象×4因子）の平均得点を示したものである。クラ

表5 クラスターⅠ（*n*=196）の再クラスター分析で抽出されたクラスターと人数

クラスター	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11～35
<i>n</i>	49	33	9	10	4	12	16	9	4	5	45
出現率(%)	25.0	16.8	4.6	5.1	2.0	6.1	8.2	4.6	2.0	2.6	23.0

表6 クラスター別の各因子における平均得点

クラスター 対象 因子名		C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	C 7	C 8
自分自身	1 内向性	2.89(L)	3.28	3.47(H)	3.67(H)	3.10	3.35	3.11	3.35
	2 自己顕示性	2.87	3.28(H)	3.09	3.38(H)	2.44	2.60(L)	3.29(H)	2.99
	3 誠実性	3.46(H)	3.25(L)	3.37	3.31	3.07(L)	3.61(H)	3.36	3.04(L)
	4 明朗性	3.86(H)	3.66(H)	3.71(H)	3.23(L)	3.29	3.57	3.28(L)	2.97(L)
母親	1 内向性	2.42(L)	2.79(H)	2.35(L)	2.12(L)	2.71	2.92(H)	2.64	2.93(H)
	2 自己顕示性	2.35	2.77(H)	2.32	2.96(H)	1.97(L)	2.34	2.52	2.25(L)
	3 誠実性	3.68	3.74	4.38(H)	3.61	3.00(L)	3.82(H)	3.41(L)	3.86(H)
	4 明朗性	3.88(H)	3.49	4.14(H)	3.87(H)	3.18(L)	3.45	3.28(L)	2.95(L)
父親	1 内向性	2.18	2.44(H)	2.12	2.73(H)	2.02	1.72(L)	2.29	2.20
	2 自己顕示性	2.55(L)	2.99(H)	2.80	2.37(L)	2.56	2.96	3.36(H)	2.90
	3 誠実性	3.78(H)	3.71	4.11(H)	3.66	3.43	4.10(H)	3.21(L)	3.24(L)
	4 明朗性	3.57	3.61	4.05(H)	3.39	3.50	4.30(H)	3.02(L)	3.03(L)

クラスター間の認知の差をみるために、この因子得点をもとにして、クラスターを要因とする一要因分散分析を行った。結果はすべての変数について、クラスターの主効果が得られた（自分自身：第1因子  $F=8.569$ 、第2因子  $F=6.336$ 、第3因子  $F=6.831$ 、第4因子  $F=12.328$  母親：第1因子  $F=12.925$ 、第2因子  $F=6.831$ 、第3因子  $F=20.610$ 、第4因子  $F=14.959$  父親：第1因子  $F=7.055$ 、第2因子  $F=11.493$ 、第3因子  $F=15.651$ 、第4因子  $F=14.798$  いずれも  $df=7, 134$  であり  $p<.01$ ）。そこで、各因子得点についてクラスター間の比較を行うために、危険率（有意水準）を .05 に設定して、Scheffé 法による多重比較を試みた。今回は、因子別の比較に留めたので、各評定対象間（自分と母親、自分と父親、母親と父親）の同一の因子得点についての比較検討はなされなかった。なお、表中に示された H と L の記号は、有意差をみせたもののうちで高い方の得点が H、低い方のものが L としたものである。

この結果をもとにして、抽出された C1 から C8 までの8つのクラスターにおける、自己と両親の認知に関する特徴の違いを相対的にはあるが記述してみよう。

#### クラスターごとにみた三者間認知の特徴

C1 ( $n=49$ ) 一番多人数で構成されている。自分については内向的ではなく、明朗であり、どちらかと言えば誠実でもあるという認知をしている。プラスの好ましい自己像を持っている学生達の群である。母親は明朗であり、あまり内向的ではないと捉えており、父親に対しては、自己顕示的ではなくて、しかもかなり誠実であると評価している。このように、両親に対する受け取り方にもカラッとしたものがあり、さっぱりとした好印象を感じる群である。

C2 ( $n=33$ ) 自分はどちらかと言えば明朗ではあるが、誠実さにはやや欠けるところがあり、自己顕示欲が強い。両親については、他の親に比べて飛び抜けてとはいえないけれど、内向的で自己顕示的であるとみなしている。特別に強すぎるという程のものではないが、自己顕示性のレベルで三者の間に共通な認識をもっている学生の集まりのようである。

C3 ( $n=9$ ) 明朗であるという点で三者は一致していると高く評価している学生の群である。自分のことを明朗ではあるが、やや内向的であると捉えている。両親については、誠実性の次元でもかなり高いプラスの評価をしている。母親に対するイメージには、自分とは異なる内向的ではない、積極的な一面を見出ししている様子が見えがえる。両親の生き方に好感をいただき、

まだ少し対峙した状態にはあるが、温かいまなざしを向けている学生の姿が浮かび上がってくる。

C4 (n=10) 自分については、内向的であり、自己顕示欲が強く、明朗でもないという、どちらかと言えば、マイナス的なイメージの強い学生達の集まりである。両親については、内向性と自己顕示性の次元でまったく逆の受け止め方をしている。母親の方は内向的ではなく、自己顕示性が強く明朗でもあるのに対して、父親はその逆で、自己顕示的でないし、かなり内向的であると把握されている。このクラスターの学生達の認知から垣間みられる家庭は、母親主導型の様である。

C5 (n=4) 最も少ない人数の学生で特徴づけられているクラスターである。とにかく人数が少ない群なのではっきりしたことは言えないが、自分についても母親についても、誠実性の面で他の群の学生達よりも低い得点をみせている。この特徴は、それほど強いものではないけれど、C6 の学生達のものとは比べれば、父親にもみられる傾向である。この他注目される点としては、母親の自己顕示性と明朗性があげられる。この2つの認知もやはりかなり低得点である。認知レベルにおける母親の存在は、かなりマイナス的であり、娘にとって影の薄い存在の様な印象を受ける。

C6 (n=12) 自分は誠実であり、自己顕示的でもないと思っている。この誠実さについては両親にも言えることである。特に父親のこの側面は高く買っている。親子がC5 の場合とは違って、誠実であるという点で一致した認識をもっている様だ。父親についてのイメージはさらに内向的ではなく、かつ明朗であるという面でも高い評価である。これに対して母親の方は、内向的であると見られている。父の存在感がどっしりと好ましい形で、学生の心の中に宿っているという感じを受ける。

C7 (n=16) 明朗ではないという点で自分と両親が一致している。自分が自己顕示的で明朗ではないという捉え方は、C4 の学生達と似ているのではあるが、両親に対する受け止め方に大きな違いをみせているクラスターである。この自己顕示という側面は、父親にも当てはまり、他のクラスターの学生達と比べた場合、飛び抜けて高い。両親にたいする共通認識は、明朗性に欠けるというだけでなく、誠実でないという点でも一致をみせる。親を自分の好ましい対象として受け入れていないのではないかという感じのする学生群である。

C8 (n=9) これも明朗でないということで三者が一致している群である。自分は明朗ではなくて、誠実性にも欠けている。この事は父親にも言え、この面でのマイナス的な認知上の父子の一致をみせている。一方、母親については変化にとんだ受け止め方である。明朗ではなく内向的ではあるが、自己顕示はさほど強くはなく、どちらかと言えば誠実である。マイナス的な印象の強い父子像に対して、ささやかながらも母親の光の射し込みをかんじるクラスターである。

#### クラスター分析についての気付き

以上、8つのクラスターの特徴を三者の認知をもとにして、相互に比較してみるやり方で記述してきた。ところで、そもそもこれらの分析の対象となった者は、最初のクラスター分析において、なんらかの意味で似ているという判断のもとにコンピューターが群化し、抽出した学生達であった。つまり、CI に所属した196名の者についてのみ再度分析にかけた、いわば「似よりの中に存在する相違」といった観点に立って弾き出させた結果である。3つの評定対象である、自分と母親、父親のそれぞれ4因子の因子得点をもとに、計12の変数を一度に操作させ



て得られたものであり、手計算などではとても太刀打ちできないやり方である。多分、コンピューターはこれまで述べてきた様な特徴に従ってクラスター分けを行ったのであろう。ところが、一度に沢山の要因を取り上げて分類を試みさせたからだと思うのだが、結局のところ、コンピューターの抽出したデータに振り回されてしまったという感じは否めない。

もともとなんらかの意味で似ていると判断されたものを無理に分けてみたのは、一体どのような根拠に基づいたものだったのだろうか。それは、あまりにもこの CI に沢山の学生たちが包括されてしまったことに起因している。それゆえ等質集団ではあっても何とかもう少し小さな群に分けられないものかと考えたのである。この観点より、本研究がまとめられたと言える。ところが、秋山はどうしても残された約30%の学生達の存在が気になり、これをも研究の対象に取り上げてみたいという強い願望を持ち合わせている。この立場からみれば、むしろ、最初のクラスター分析で得られたデータ、つまり、CI が全体の70%を占め、残りが30%であったという事実だけでよかったのかもしれないと今になって思う。なぜに大半の学生が似ていると判断され、残りのものがそうではないとして、コンピューターにより区別されたのか。手計算的アプローチがまだ研究の中心である現状では、謙虚にこの時点で手探りを始めるべきだったのだろうかとも考えてみたりする。

いやいや、そうではなく、まずは何といっても、56項目が4つの人格認知因子から構成されたものであったという事実を素直に認めるべきである。そしてさらに、評定の方角をも考慮した因子別得点を用いてクラスター分析が試みられたという、この努力に深い満足を味わうべきであろう。7区分表示法ではつかみ切れない何かを、コンピューター操作の中から発見し、それをうまくこれまでの研究の流れに即組み込み生かそうとした焦りの気持ちが前に出すぎたようである。「分類結果からその意味するものを汲み上げるには鋭い洞察眼が必要であろう (p. 259)<sup>5)</sup>」との指摘を噛み締めてみるべきである。焦りはとにかく禁物である。

現在この研究と平行して、7区分表示法を用いる分析(処理)も進めているが、今回のこの気付きを生かしたい。一度に自分と両親の結果を読みとろうとするのではなく、まずは自分自身についてのデータを取り上げ検討してみる。次いで、これをベースにしていくつかのグループに分ける操作を施し、これら相互の比較をする中で、群間に存在するであろう両親の捉え方の違いをも探るといって、二段階のやり方で攻めて行くべきだと思うようになった。コンピューターに振り回されないで自分のペースを守ること。かつ、よき援助者としてコンピューターと地道にかかわるにはどうしたらよいのか。新しい課題がまた一つ増えた。とにかく前向きに取り組む姿勢だけは維持したいものである。

平均的なデータを駆使する基礎研究(客観性)と、一人一人を大切に生かそうとする臨床(主観性)の接点を見出すことは、何と難しいことなのだろう。「全体と個のテーマ」つまり、「全体の中に個を生かす」という研究方針の具現化への努力は、いまだに足踏みの状況にあるのだろうか。

#### 4 これからの見通し(研究の展望)

少なくともこの一連のクラスター分析を通して分かりかけてきたことは、女子学生達の自己についての把握と両親についてのそれとは、一先ず切り離して検討する方がよいのではないかとということであった。今一度、この研究に取り組み始めた頃の初心に帰りたい。彼女達は一体自分をどのように理解しているのか。その自己認知の中に取り込まれている(いく)両親像、つまり、自己の心の中に生きている父母像とはどのようなものなのだろうか。また、自己と父母についての受け止め方には個人間にどの程度の相違というものがあるのだろうか。こうした三

段階を、とび越えることなく、丹念に一つ一つ見通していくことこそが、大事な事なのだと思う。この様なアプローチこそが結局は、全体と個のテーマ、言い換えれば、基礎的研究（平均的人間像）と臨床的研究（一人一人にかかわるもの）の接点を求めようと模索しているこの生き方に、一歩でも半歩でも近づける道のような気がするのである。この道にしてもやはり近道はない様だ。

文献検索を進めているうちに、この研究に指針を与えてくれそうな、3つの生き方がクローズアップされてきた。

まず第一に上げられるのは、辻岡・山本の親子関係の相互認知についての研究である。彼らは因子分析の手法を駆使して、表面的特性 (surface traits) がいかなる源泉的特性 (source traits) によって構成されているのかを、厳密に析出しようと試みている。親子相互の認知構造の源泉的特性の存在を信じ、人間の頭では処理しきれない部分を、最大限にコンピューターの力を借りて探り出し、親と子の相互認知を4次元的に把握しようとしたものである<sup>14)</sup>。今の私にはコンピューターを縦横無尽に活用する能力も時間もないけれど、彼らを取り出してくれたものを利用することはできるかもしれない。

その二は、西平の生き方であろう。西平は1983年に、それまでの二十数年間にわたる彼の青年心理学研究の集大成を世に問うた<sup>9)</sup>。そして、この翌年の1984年には、鑑が「青年期の臨床的研究」と題する展望の中で、この西平の研究態度の変遷に触れている<sup>12)</sup>。鑑はこの展望において、Erikson の「同一性」を真に生きた概念として甦えらせるような研究を行うことが青年心理学そのものを活性化することになるのであり、そのためには事例研究を重視する臨床的手法がもっともっと要求されるべきであると主張している。この指摘の箇所において、西平の報告が印象的なものとして紹介されているのである (p.107)。そこには西平が Erikson の identity 概念にふれ、はじめはこれを尺度化しようと努力し、やがてはその不毛性に気づき、次第に事例研究的な世界に入って行き、ついには「伝記研究」に行きついたという道程のことが記してあった。西平が identity 概念に導かれ、主体的に大変苦しみながら、次第に臨床的な方向へ進まざるを得なかったのは一体どうしてだったのだろうか。またこの事実に強い印象を受けた鑑は何に感動しているのであろうか。自己形成と親子関係の関連性に興味を抱き、基礎と臨床の接点をもとめながらも、その周辺を逡巡するのみで、気付いてみると、いつの間にか認知レベルでの調査研究の中のみどっぷりと浸かってしまっている自分。こんな自分に対して、この人もやはり研究者としての生き方の、一人の大切な先達なのであろう。

第三は、西平が尺度化しようと努力していた、その同一性概念の実証的研究である。これは、Marcia, J.E. (1966) の同一性地位の研究が発表されて以来、活気づいてきたもので、半構造化面接法と質問紙法による新しい研究の流れである。無藤 (1979)<sup>7)</sup> と加藤 (1983)<sup>6)</sup> の論文に触れたことに始まるこの文献研究は、高橋の批評的展望<sup>11)</sup> と、鑑・山本・宮下の自我同一性研究の展望<sup>13)</sup> へとつながり、視野を拡大させていくことができた。秋山の今一番身近な研究課題は、青年後期の女子学生が自分と両親をどのように捉えており、その相互の関係はいかなるものであるかということである<sup>2)3)4)</sup>。この分析の後に続くものとしては、この認知関係がその後も変化せずに維持されるものなのか、それとも、長期間の間には変化をみせるのかを調べることにある。もし、後者ならば、その変化には一定の方向性がみられるのか、また、その際の切っ掛けは何によるのかということに興味をもっているのである。独断的な行き方ではなく、一つの大きな流れに沿ったものであるという安堵感の裏付けとして、この2つの展望は大切な存在となっていくことであろう。

一人の研究者が、一つの課題の下で、沢山の人の生き方と息の長い付き合いを続けていくこ

とは容易ではないし、まだ確固とした研究方法も持ち合わせていない。そんな現状ではあるけれど、この第三の生き方に包含されるものとして、下仲 (1980) の研究方法を上げたい<sup>10)</sup>。彼女は、老人の自己概念を青年群と対比させて捉えようとしているのである。日本はこれから急速に高齢化社会を向かえることになる。その時の準備のためにも、この方面の研究は大切なものとなるであろう。ところで、この下仲の方法をもう少し拡張して用いるならば、新しい研究の道が開けてくる。それは、青年期から老年期までの発達段階をもう少し小刻みにとり、成人が自己というものをどのように把握しているかについてまず調べてみるのである。そして、この大人達の自己概念との比較により、青年達がこれからどのように歩むべきなのかの指針となるような方向づけを探るのである。

以上、3通りの生き方を取り上げ検討してみたが、第一の生き方はできそうにない。多分将来は、第二の生き方を辿ることになるのであろうが、今暫くの間は、第三の道をもう少し歩み続けてみたいと強く思っている。

オランダに住む精神医学者ヴァン・デン・ベルクは、人間の生というものが変化し続けるという事実に、彼の研究の原点を置いている。つまり、人間は変化するのだということと、人間はひとりひとり違うんだということを学問の根底に据え、「見る」という彼の行為そのものを大切にしているのである。彼の現象学 (phenomenology) は、問題解決の学というより、問題提起の学であると早坂 (1982) は述べている<sup>15)</sup>。まずは「生きている。生きていく。」という次元に目を据えて、素直に女子学生達の捉えた自己と父母像を見ること。この見ることの原点から出発し、発達的に変化するであろう三者の認知の推移を慌てることなく、焦ることなく、気長に見守ればよいのであろう。母と父の関係や父—母—子の三角形的な関係における心理力動性を見直すことにより<sup>12)</sup>、現代問題となっているさまざまな青年期の病理の一端が切り開かれることを期待したい。認知のずれとか、情緒のもつれとかいった、案外簡単な事柄のなかに人間関係の真実が潜んでいるような気がしてならない。

(謝辞) 研究にあたっては、広島大学教育学部の山本多喜司教授の温かい御配慮をいただきました。また、御多忙なスケジュールにもかかわらず、わざわざ私達の為に貴重な時間をさいて御指導下さいましたことに対し、厚く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について、広島文教女子大学研究紀要 VIII 23-38 1974
- 2) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(2)——4年間の縦断的研究—— 広島文教女子大学研究紀要 XV 45-74 1980
- 3) 秋山幹男 女子学生における自己と父母の認知について(3)——タイプ分析の試み—— 広島文教女子大学紀要 16 61-72 1981
- 4) 秋山幹男 「父—母—娘」三者間の認知について(2)——娘(学生)における2種の認知タイプと両親の結果—— 日本心理学会第46回大会予稿集 284 1982
- 5) 東 洋編 心理学研究法 15 データ解析Ⅱ 東京大学出版会 1974
- 6) 加藤 厚 大学生における対人的価値観の測定 教育心理学研究 31 292-302 1983
- 7) 無藤清子 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性 教育心理学研究 27 178-187 1979
- 8) 西平直喜 新しい存在と価値の発見 津留宏編 青年心理学 133-180 有斐閣 1970
- 9) 西平直喜 青年心理学方法論 有斐閣 1983
- 10) 下仲順子 青年群との対比における老人の自己概念——世代差、性差を中心として—— 教育心理学研究 28 303-309 1980

- 11) 高橋裕行 自我同一性と Marcia の同一性地位面接：批評的展望 教育心理学研究 32 320-328  
1984
- 12) 鐘幹八郎 展望 青年期の臨床的研究 教育心理学年報 23 103-117 1984
- 13) 鐘幹八郎・山本力・宮下一博共編 自我同一性研究の展望 ナカニシヤ出版 1984
- 14) 辻岡美延・山本吉廣 親子関係の相互認知——小嶋氏の原資料の分析—— 教育心理学研究 25  
18-29 1977
- 15) ヴァン・デン・ベルク・早坂泰次郎 現象学への招待——〈見ること〉をめぐる断章—— 川島書  
店 1982

(幼児教育学科 助教授 秋山幹男)  
(広島大学教育学部 助 手 有馬道久)

—昭和 60 年 10 月 9 日受理—